

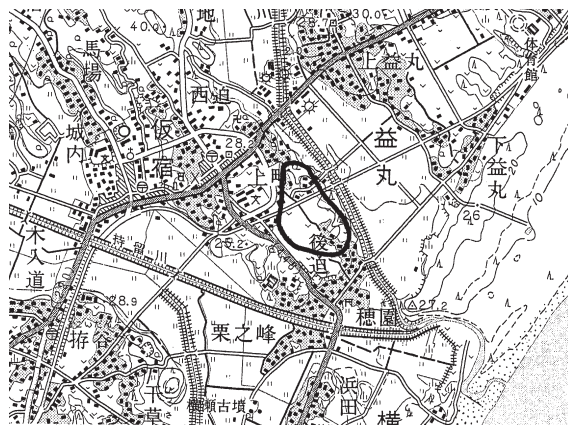
(曾於郡大崎町神領・横瀬)

位置と環境

神領古墳群は志布志湾に南流する田原川・持留川との両河川に取り囲まれた標高20～25mの古砂丘にある舌状台地上に位置する。この古墳群は前方後円墳4基、円墳9基、地下式横穴墓7基があり、これらを総称して神領古墳群と呼んでいる。

調査の経緯

地下式横穴墓1号（竜相地下式横穴墓）は、昭和34年（1959年）、河口貞徳によって調査された。昭和37年（1962年）、6号墳（天子ヶ丘古墳）から、地主によって日光鏡と変形獣帯鏡各1面が採集され、その後昭和43年（1968年）には大崎町教育委員会が調査主体となり河口貞徳が発掘調査を行った。地下式横穴墓3号・4号は、1980年（昭和55年）に大隅分布調査により、県教育委員会によって調査された。昭和62年（1987年）には、畑が陥没したことによって偶然発見された地下式横穴墓5号を、県教育委員会の協力を得て大崎町教育委員会が調査した。地下式横穴墓6号は町道町西・後迫線改良工事に伴い発見され、平成2年11月に調査した。さらに、畑の陥

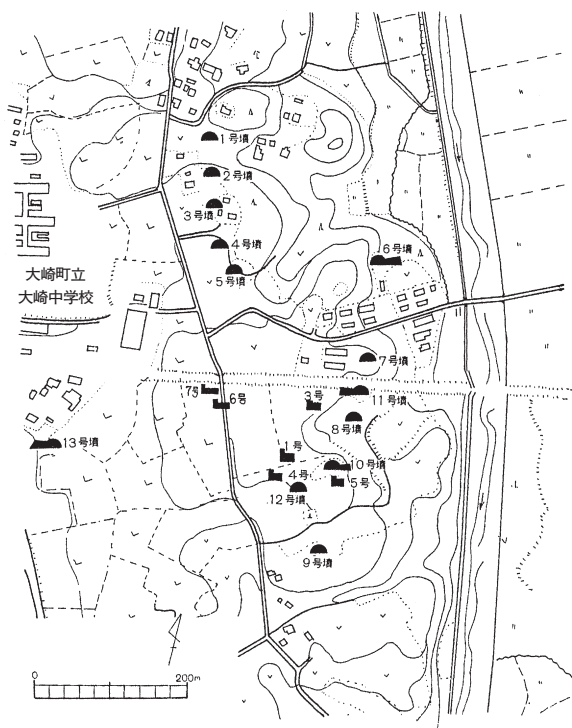
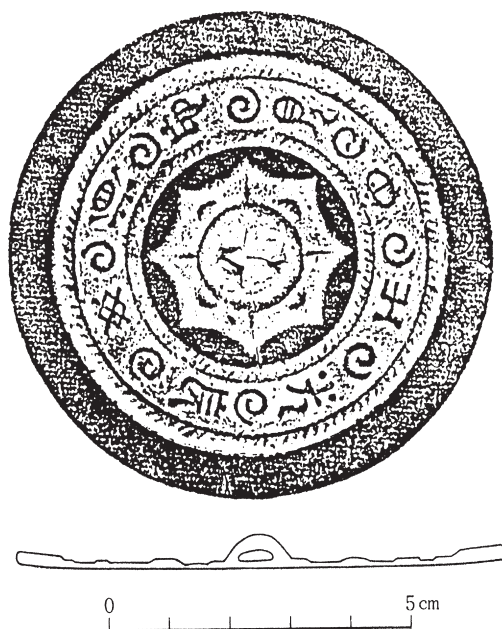


第1図 神領古墳群の位置

没による地下式横穴墓7号の調査が平成5年に行われた。

遺構と遺物

天子ヶ丘古墳は、調査の結果によって全長50m、後円部径23m、前方部幅15m、高さ3mの前方後円墳である。後円部中央に組合式石棺が埋設されているが、墳丘の軸線より9度東の方向に向いている。石棺は花崗岩板石7板を使用し、内径で縦200cm、北端幅56cm、南端幅43cm、深さ35cmを測る。床面や蓋にも同様の板石を用い、その上をさらに屋根形に加工した石で覆っている。石棺内部は丹塗りされ、外部の石の継ぎ目には粘土の目ばりがなされていた。埋葬された遺体は頭部を北に置き、その右に変形獣帯鏡を副葬し、棺外北側に接した台石の上に日光鏡、

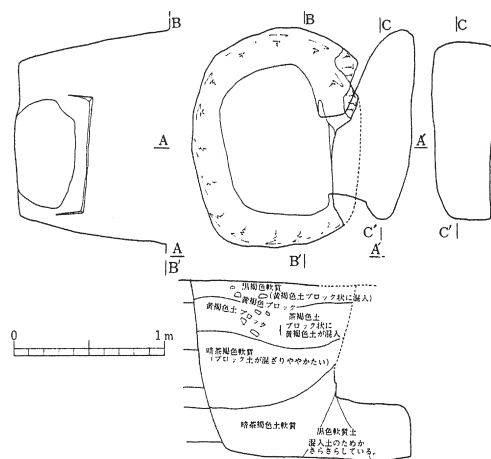
第2図 各古墳の位置（ 前方後円墳,  円墳,  地下式横穴墓）第3図 天子ヶ丘古墳の日光鏡
(諏訪1972より転載)

棺外の東側壁に沿って南寄りに刀、西側壁に沿って南寄りに剣が副葬されていた。日光鏡は径8.1cmで、「見日之光長母相忘」の銘文がある。変形獣帯鏡は径9.1cmの仿製鏡である。天子ヶ丘古墳は5世紀中頃の築造と考えられている。

竜相地下式横穴墓（地下式横穴墓1号）は、竪坑は幅70cm、深さ2mで、玄室は長さ2.6m、奥の幅1.37m、入口の幅1.72m、高さ1.1mの長方形を呈する。天井部は切妻の屋根形で、羨道は土塊で封鎖し、妻入りとなっている。玄室は内壁と天井を丹塗りし、床面中央に25枚の軽石の切石による組み合わせ石棺が安置されている。石棺の継ぎ目は粘土で目張りし、内面は丹塗りされている。軽石石棺は内径で長さ1.68m、幅30～23cm、高さ19cmを測り、蓋石は屋根形に作られている。副葬品は剣（70.8cm）1点、骨製簪1点、イモガイ製釧2点、内行花文鏡（径8.6cm）1枚が出土した。鏡は円形の紐座で、紐は紐ずれがいちじるしく、七弁の内行花文をもつ仿製鏡である。埋葬時期は5世紀後半と考えられている。

地下式横穴墓2号は、玄室等の形状は明らかではないが軽石石棺が認められる。

地下式横穴墓3・4号は、玄室がドーム状で羨道の取り付けが平入りのタイプであり、副葬品は無い。3号の玄室は幅0.35～0.5m、長さ1.25m、高さ0.4mと非常に小さい。4号の玄室は幅0.55～0.85m、長さ1.8m、推定高0.6mで、壮年者のものと考えられる歯が出土した。



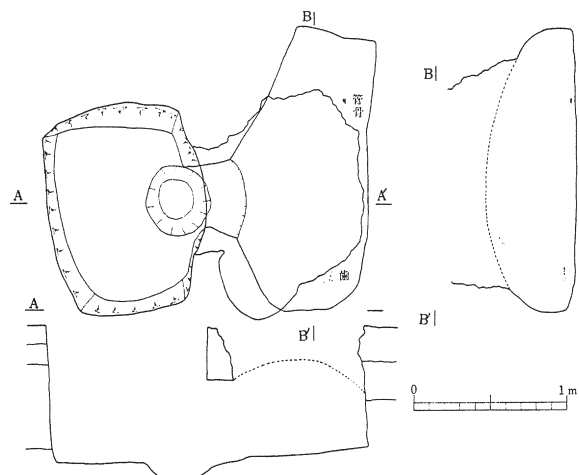
第4図 地下式横穴墓3号

地下式横穴墓5号は、玄室が家形で羨道の取り付けが妻入りのタイプである。玄室は幅1.28m、長さ2.10mでほぼ長方形をしている。高さは側壁部分が0.2m、最も高い位置で0.72mである。副葬品にイモガイ製の貝釧が1点みられる。

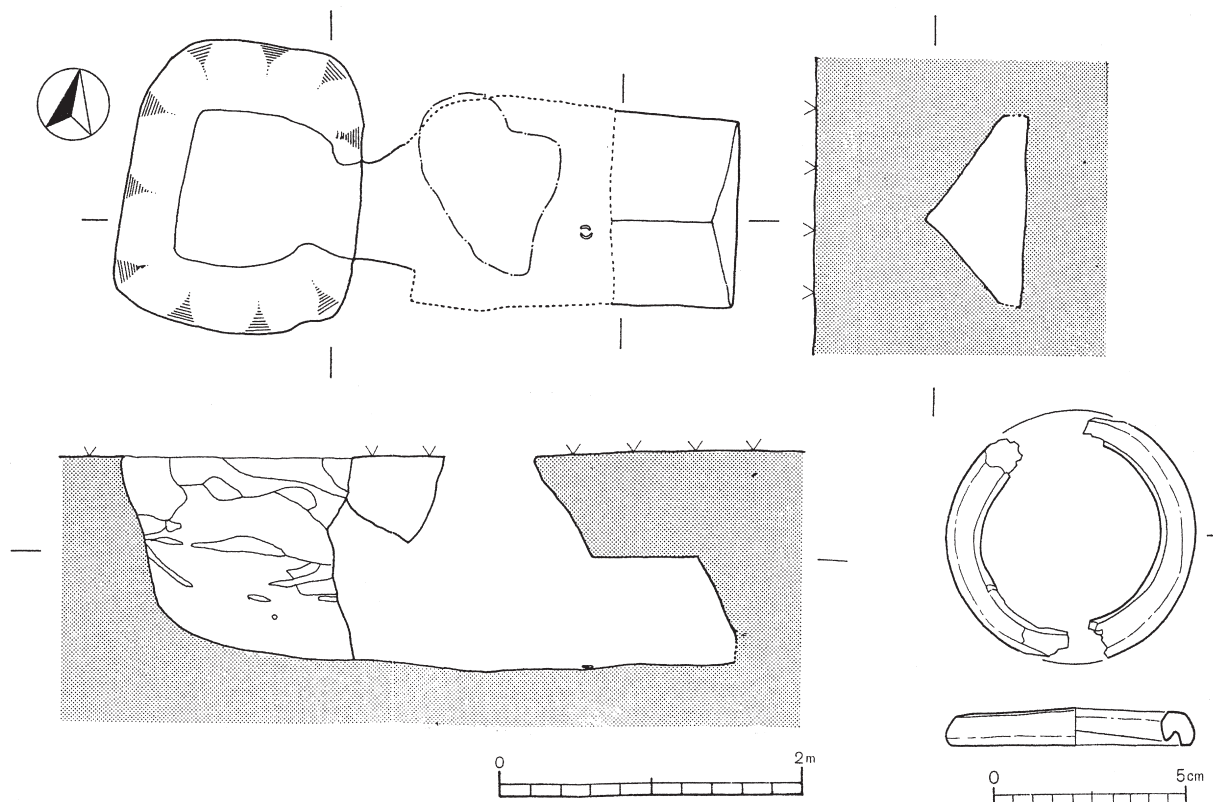
地下式横穴墓6号の主軸は、ほぼ東西方向で全長2.25mを測る。竪坑部は西側にあり1.5m×1.2mの長方形プランで、深さは約0.8mである。羨道部は上辺0.7m、底辺0.45m、高さ0.65m、奥行き0.25mである。羨道部の玄室への取り付けは平入りで、やや南側に片寄っている。竪坑の羨道部寄りから羨道部へかけて凹みが見られる。羨道部の閉塞についてみると、土塊等が見られないことから板による閉塞であったものと推定される。玄室は、平面プランが幅0.6m～0.8m、長さ2.3mの長楕円形を呈し、高さは約0.7mで天井部はドーム状を呈する。また、玄室の主軸はN-5°-Eで、地下式横穴墓6号の中心軸N-9°-Wとは直交しない。玄室内の南側には歯が数本、北側には管骨が残存しており、頭部を南側に置いた伸展葬と推定される。人骨の他に副葬品等は認められなかった。

地下式横穴墓7号は、長方形の玄室を土塊で封鎖する妻入りのタイプである。竪坑には階段状の段が認められた。天井部分は屋根形で、廂部分も作り出している。人骨と共に刀子が1点副葬されていた。

これまでの研究成果で、地下式横穴墓については玄室の形状が長方形家型で羨道が妻入りの方向に向き石棺をもつ古いタイプと、玄室の形状がドーム型



第5図 地下式横穴墓4号



第6図 地下式横穴墓5号及びイモガイ製貝釦

で羨道が平入りの方向につく新しいタイプが知られている。前者が概ね5世紀代であり、後者は6世紀代と考えられている。神領古墳群の地下式横穴墓でも両方の形態がみられ、台地上での墓制の変遷を知ることができる。このことから、地下式横穴墓2号・5号・7号が5世紀代に、地下式横穴墓3号・4号・6号は6世紀代に位置づけられる。

特徴

鹿児島県内で前方後円墳の内部及び地下式横穴墓から鏡が出土した点が特筆される。また、高塚古墳と地下式横穴墓が共存しており、日本の南端において両者の関係を明らかにするのに重要な古墳群である。南島産のイモガイ製貝輪が使われた最終段階を知る上でも興味深い。

資料の所在

出土遺物は、大崎町教育委員会に保管・展示されている。

参考文献

諏訪昭千代1972「大崎町出土の古鏡とその年代について」『鹿児島考古』第5号

鹿児島県教育委員会1984「大隅地区埋蔵文化財分布

調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』29

大崎町教育委員会1988「神領地下式横穴群5号」

『大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

大崎町教育委員会1992「神領地下式横穴6号」『大

崎町埋蔵文化財発掘調査報告書』2 (東 和幸)



第7図 地下式横穴墓6号